

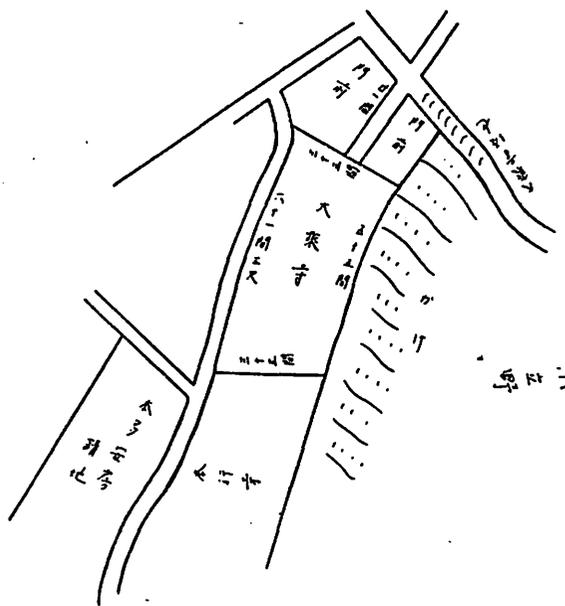
なるゆゑ也。

○大乗寺門前地跡

延寶の金澤圖に下の如く載せたり。この圖に見わたる如く、大乗寺坂の麓なる往來脇に、そのかみ大乗寺門前地ありて、此に小家どもありたるなり。元祿年中大乗寺石川郡寺地山へ移轉の後、舊寺屋敷と共に、門前地も揚地と成りたるなるべし。

○大乗寺舊地

大乗寺は元眞言宗なり。富樫家尙石川郡野々市に創立せられ、追而徹通禪師を請じ禪刹となしたり。元亨三年の洞谷山置文に、大乗寺者先師開法之加州第一之貴寺。ともありて、禪刹開法の舊地なり。然りといへども長享二年富樫氏滅亡の後は、國亂の際度々兵火に罹り、寺地を所々に轉ず。故に舊記散逸して其の詳かなる事を知らず。津田鳳卿の石川訪古游記に、天正初柴田勝家燒夷野市。寺廢。藩建國初開聽十四世住持虛室請。賜木新保加藤重康下邸内地。慶長初公命收寺地。作外塹。此云惣構。又移居本多房州上邸側。尋再收寺地。賜高山右近高房爲宅地。慶長六年遷大乗寺



坂上。元祿中依政脚本多安房守政敏請。賜富樫郷寺地山^{ナラシキ}地。云々。とあり。按ずるに、正徳元年の松蔭林^(松蔭林)中興碑には、

元和年中又移於石浦地。今俗曰安房殿町。と載せたり。是即ち大乗寺坂下の寺地をいへり。高澤忠順の金澤事蹟必録には、大乗寺は當國の守護富樫氏の檀那寺にて、野々市にありしが、本願寺門徒富樫氏を謀り、或夜大乗寺を燒く。守護の被官驚き、此寺へ集る處、富樫の館無人と成り、門徒共館内を襲ひけるに、富樫氏遁れて京師に走り、門徒一揆遂に當國を奪へり。此時大乗寺、野々市を立去り金澤に來り、笠舞領に移る。今大乗寺屋敷と唱ふる所なり。此地卑濕にして境内狭く、依りて寺地山へ移る也。とあり。右

大乗寺屋敷といふは、則ち大乗寺坂下の舊地也。此の寺跡後々迄も大乗寺屋敷と唱へ、明地と成り、步數二千歩許ありしを、寶曆十年本多氏下邸の地内を揚地としたる際、その替地として賜はり、下邸へ取込みたりといへり。青山永保曰く。大乗寺坂下なる明地をば、大乗寺屋敷と唱へ、二千歩許の緩き地なるにより、本多家より下邸の地繼ぎなるを以て、取込相成度旨毎度申立ありしといへども、普請會

所に於て彼是申立て埒明かず。然る處寶曆九年の火災後、牛右衛門橋口の方揚地に相成り、右代り地に請込方申入れ、遂に開厩に相成由、其の頃の留記に見ゆ。といへり。

○白山水

大乗寺舊地の地内に清水涌出づ。是いにしへ此の地に寺院ありし頃の白山水なりといへり。龜尾記に云ふ。野々市天満宮の向うに白山水あり。は大乗寺いにしへ此の地にありし時の白山水也。刀鍛冶安信が銘に、以白山水鍛之とあるものを見たり。是も野々市にて白山水を以て鍛へたる刀鍛なるべしと。或は云ふ。大乗寺の白山水は、宗祖道元禪師入唐中、白山の神靈出現し給ひ、碧巖集の助筆ありとの傳説に依りて、大乗寺の寺地には必ず白山水とて清泉あり。今寺地山の^{大乗寺}にも白山水あり。されば金澤の大乗寺屋敷にも、此の靈水涌出づる事さもあるべし。といへり。平次按ずるに、越後國三嶋郡脇之町村と云ふ所に白山水あり。白山宮の山の^{下街}の傍に涌出づと越後名寄にいへり。然れば白山水てふ靈泉は、白山比咩神の神水にて、大乗寺に限るにあらず。